



## ▲ 資料館の展示

### 秋期特別展示「飛鳥のイメージ」

飛鳥資料館では、毎年、春と秋の2回にわたり特別展示をおこなっています。今年度の特別展示は、春期に「遺跡を探る」と題しておこないましたが、秋期には飛鳥時代の復元イメージを集めた写真パネル展「飛鳥のイメージ」を2001年10月16日（火）～12月2日（日）の会期で開催しました。これだけのものが一同に会する機会が、これまでなかつたためでしょうか、近畿圏だけからではなく、関東や九州など遠方からも数多くの方々が来館され、好評のうちに幕を閉じました。



秋期特別展示ポスター

歴史上の出来事や当時の人々の生活については、発掘調査や古代の資料の研究などから多くの論文が書かれ、さまざまなことがありますからとなっています。しかし、こうした文章から古代社会の情景を具体的に思い浮かべることは、易しいことではありません。

これまで、当館では折りにふれ、飛鳥時代の都のありさまや人のいでたち、戦争の様子などを、目に見える形で復元し紹介してきました。1987年度の特別展示においては、春の「万葉乃衣食住」で古代の台所の様子を、秋の「壬申の乱」では、その戦いの様子を模型制作し展示しています。また、奈良文化財研究所としても、平城宮跡を訪れる人々が、奈良時代の都の姿を思い浮かべる一助となるよう、いくつかの建物と庭園を实物大で復元展示しています。

ただし、こうした復元は絶対的なものではありません。1997年度に復元された平城宮の朱雀門は、何千何万とある復元案の中の一つにすぎないです。かといって、でたらめというわけではありません。長い年月を費やしておこなわれた調査・研究によって、もっともふさわしいと思われる姿で復元されています。いわば、調査・研究の賜物なのです。

しかし、資料の増加や発掘調査・研究の進展によって、改めなければならなくなることもあります。まったく異なるものとなる可能性もなくはないのです。それでもなおこうした復元の作業は、一方では古代史研究の成果を確認し、もう一方では多くの人々にそれを伝える重要な手段といえます。

秋の特展「飛鳥のイメージ」は、当館がこれまで制作してきたものを中心しながら、他館の協力も得て、飛鳥時代にかかる復元イメージの集成を試みるものなのです。この展示を通して、飛鳥の歴史に対する一般的興味を少しは深めていただけたのではないかと思います。

（飛鳥資料館）

## 発掘速報展平城 2001 「奈良の都を掘る」

平城宮発掘調査部が実施した発掘調査のうち、2000年度の成果を主体として、一部2001年度の成果も含めて速報展示したものです。11月13日～25日まで、平城宮跡資料館で実施しました。

展示は、遺跡展示と遺物展示に分かれます。遺跡展示は、平城宮では、第一次大極殿地区（315・316次）、平城京内では、左京三条一坊（314-17次）興福寺中金堂・回廊（325次）興福寺一乘院（317・321次）興福寺大乗院（317・321次）西隆寺（320・324次）です。発掘遺構の写真パネル、実測図、復原図などにより、わかりやすい展示をめざしました。

遺物展示は、第一次大極殿地区（315・316次）出土の木簡、一乘院（317・321次）出土の土器、瓦、銅工房関係遺物を展示しました。



速報展の観覧風景

とくに、生の木簡の展示は好評で、「難波津の歌」の一節を記した木簡はとりわけ人気を集め、くいよいように眺める姿が見られました。

木簡の展示にあたっては、期間の前半と後半で木簡を入れ替え、毎朝、夕に保存液の点検をおこないました。また、展示ケースには、紫外線測定器を設置し、展示環境のデータ採取に努めるなど、保存に万全を期しました。

この展示では、同時に「天平の貴族」と題して、奈良時代のファッショントを復元した人形4体を展示了しました。華麗な天平の衣装は、リアルな人形とあいまって、観覧者の目を楽しませました。これは、1988年に制作したもので、今回が、研究所での初披露となりました。

今回の展示に際しては、平城宮跡発掘調査部、埋蔵文化財センターの多大な協力を得ました。このような展示は、研究所が実施している種々の発掘調査の成果をまとめてご覧いただける機会ですので、今後も続けていく予定です。

（文化財情報課）

## ▲ 発掘調査の概要

### 旧大乗院庭園の調査（平城第336次）

大乗院は、かつて南都唯一の名園と讃えられた庭園です。財團法人日本ナショナルトラストによる保存修理事業に伴う調査として、奈良文化財研究所では1995年から国指定名勝旧大乗院庭園の発掘調査をおこなっています。

大乗院は一乘院とならぶ興福寺の門跡寺院であり、一乘院から遡ること約100年後の11世紀半ばに創立されました。大乗院門跡は有力貴族の子弟を迎える、平安・鎌倉・室町・江戸時代を通じ、社会的、経済的に強大な権力を誇り、その庭園は各時期を通じ、名高い庭園であったことが、文献資料などから



現地説明会風景

読みとれます。

今年度の調査区は西小池の推定位置にあたります。江戸時代末に描かれた『大乗院四季真景図』には西小池が描かれていますが、現在では埋没してしまっています。今回の調査では、西小池の北部分が姿を現しました。

調査区北側では、昨年度の調査でも検出された漆喰池の続きや階段状石組、石組構などが検出されました。また、池の北側には、それらから流れこむ水を浄化するための淨水施設があり、絵図からは読みとれない池の細部が、今回の調査で明らかになりました。

12月8日には、一般の方々にむけた現地説明会を開き、約180人の方々にご参加いただきました。調査は12月末までの予定で、断ち割り調査を通して、西小池の造成時期などに関する解明を目指します。

### 平城宮第一次大極殿院西棲の調査（平城第337次）

平城宮跡では本年度、第一次大極殿復原事業が起

工されました。大極殿は四周に回廊を巡らせていて、これに囲まれた部分を大極殿院と呼んでいます。今次調査は、大極殿院復原事業の事前調査です。調査地は大極殿院の南端、南面回廊の中央に聞く大極殿院門間の西側です。調査面積は1260 m<sup>2</sup>。

調査地から門間を挟んだ対称の位置では、1972年に発掘調査が行なわれ、南面回廊の北半部に食い込むような建物があったことがわかりました。このとき掘り上げられたのが、平城宮跡遺構展示館に「平城宮最大の柱」として展示されている掘立柱の柱根です。その大きさから、この建物は高い柱をもつ楼閣建築であったと推定され、「東樓」<sup>じょうろう</sup>と呼んでいます。



発掘現場

発掘調査は、東楼と対称の位置に西楼はあるか、西楼の規模と構造は東楼と同じか、をテーマとしました。10月11日、まず調査区西半から着手。確認できた遺構は、西楼取り壊し後に敷き詰められた小石層、西楼の掘立柱抜き取り痕跡と礎石の据え付け痕跡、回廊礎石の据え付け痕跡、大極殿院内庭に敷かれた小砂利など。それらはまさに東楼を折り返した位置に現れました。

今季の調査は東半の小石層を確認して、しばしお休み。東半の遺構確認や柱穴の掘り下げは来年度実施する予定です。はたして「最大の柱」を上回る巨大柱根は眠っているのか。（平城宮跡発掘調査部）

#### 藤原宮大極殿院の調査（飛鳥藤原第117次）

秋の現場班は、10月から大極殿院東回廊部分の調査を開始しました。大極殿東方に建つ東殿を対象とした北区（約1200 m<sup>2</sup>）と、回廊およびその東側に建つ大型建物西端の確認を目的とした南区（約500 m<sup>2</sup>）に分けて調査しています。

この一帯は、約60年前に日本古文化研究所が壇掘り調査をおこない、遺構の概略が判明しています。

今回はそこを面的に調査し、回廊と東殿の細部構造を明確にすることが目的です。12月現在、南区についての調査が進行中です。

まず南区の東端では、1999年度の調査で確認した東西棟大型礎石建物の西妻を検出しました。これによって、桁行9間、梁行4間の規模をもつことが確定し、藤原宮では大極殿に次ぐ大規模な建物であることがわかりました。

また、大極殿を取り囲む回廊は、幅6 mの複廊であることを確認しました。2カ所に礎石が残りますが、他の礎石は後世に抜き取られています。この周辺には、大量の瓦が堆積していました。

なお、11月初旬には、カンボディアからの研修生



回廊周辺瓦堆積の調査風景

3名を迎え、国際色豊かな現場となりました。調査は3月までの予定で、これから北区（東殿）の本格的な調査に入ります。

#### 石神遺跡の調査（飛鳥藤原第116次）

石神遺跡は、齐明朝（655～661年）のころに異国や辺境の民への饗宴をおこなったり、客館として機能した場所と考えられています。現在、飛鳥資料館に展示している石人像と須弥山石は、明治時代にこの遺跡から掘り出されたものです。

調査は7月からはじめ、およそ5ヵ月かかってようやく終了しました。発掘した面積は約500 m<sup>2</sup>ですが、遺構が複雑に重なりあってるので、ひじょうに手間がかかります。

今回の調査では、齐明朝の石神遺跡の北を区画する施設がみつかりました。調査区を横断する東西の掘立柱塀と、それに並行する石組みの水路です。また、この水路とT字形に接続する南北の水路も2条あり、いずれも石で護岸されています。さらに、いくつかの掘立柱建物のほか、時期の違う遺構も確認しています。

これらの遺構をご覧いただくために、現地説明会を10月6日に開催しました。新聞・テレビで報道されたこともあって、参加者約600人と盛況でした。

調査終了後、現地は水田に戻っています。



石神遺跡の全景と調査区（北から）

#### 奥山廃寺の調査（飛鳥藤原第114-8次）

明日香村にある奥山廃寺の東門改修にともなう事前調査です。東西3.5m×南北2mという小さな調査区ですが、南北に並ぶ金堂と塔の中間部分の東側にあたり、これまでの調査成果から、奈良時代に施された瓦敷きの検出が期待されました。

瓦片と礫がつまつた、まさに瓦礫というふうにふさわしい層を掘り下げると、瓦敷きが顔を出しました。意識的に凸面を上に向けて敷いた比較的大きな平瓦や、ばらまいたと思われる小片があり、その中には長さ38cm、幅25cmをはかる鷹尾の破片もあります。奥山廃寺での鷹尾の出土は初めてです。

この瓦敷きの下層には、7世紀前半の瓦で整地した瓦層があり、瓦敷きを施す前に、比較的大規模な伽藍内建物の改作があったことがうかがえます。

わずかな面積の調査でしたが、実りの秋にふさわしい成果をあげることができました。



奥山廃寺の調査区と塔跡に建つ十三重石塔

（飛鳥藤原宮跡発掘調査部）

## 文化財関係研修の実施

### 発掘技術者研修「文化財写真課程」

8月21日より9月21日の日程で、文化財写真課程の研修をおこないました。

今回から、平城宮跡発掘調査部に新設された「写真資料調査室」が担当で、本年の参加者は例年よりすこし少な目の10名で、「少数精鋭」の研修でした。

本研修の内容は、文化財調査に必要不可欠な「写真記録」に対する基礎知識や、技術の修得を目的とした研修で、その内容は非常に多岐にわたります。まず、記録材料である写真感材の基礎知識から撮影、そして撮影された写真の保存から、その活用である印刷技術の基礎知識まで及び、1ヵ月という長期間にもかかわらず、例年やや消化不良の感が否めない研修です。

本年の参加者は少人数が幸いして参加者各自が指導者と十分なコミュニケーションを取ることができ、理解度は高かったと思われます。

前半の座学ではいわゆる「写真専門学校」で教えるような専門知識を講習するため、写真の専門教育を初めて受ける研修生はついていくのに精一杯の様子がありありと見え、理解する段階にはなかなか達しないようです。

後半には実習があり、参加者は撮影から現像・焼き付け、図版割付までを2名ないし3名のグループでおこなっています。図版割付の時、参加者が日々に声を上げます。「縦画面が必要な図版で縦画面の写真がない」「露出不良でコントラストのしっかりした写真がない」「フレーミングが悪くてトリミングができない」「ピントが合ってない~」

上流（撮影）で流した污水は下流（印刷）で取り除くことはできない。つまり「よい撮影をすることがすべてに優先する」という文化財写真の基本を実感することになります。

講師陣には、我が調査室のスタッフをはじめ、写真業界の第一線で活躍している外部講師や、印刷業界の最前線を行く印刷会社の技術者をそろえております。講師陣すべてが「埋蔵文化財写真は撮影された写真そのものが文化財であり、豊富な情報量とそれを保存する環境がなければ文化財写真とはいえない」という共通の考え方に基づいて講義をおこなつ

ているのもこの研修の特徴です。

技術の習得も大事ですが、そういった考え方を学び取ってもらうことが我々の目的です。

### 発掘技術者研修 「測量外注管理課程」

この研修は、遺跡測量を外部へ発注する際に、1) 適切な仕様書が提示できること、2) 成果品が点検できること、のために必要な基礎知識と実務を習得する目的です。基礎知識を得るためにには、測量の実際を体験することが理解への近道ですので、班に分かれて実習をするわけですが、今年はある班で水準測量の成果が悪かったために、日没後に再測するというようなハプニングもありました。測量の実際は体験すればよい、という程度に考えていましたが、結果があまりにも悪いと、どうしてもやり直したいというのは人情であろうと思われます。



実習風景

実習は二段階に分かれています。一つは、光波測距儀を使って宮内を1 km にわたってトラバースする基準点測量を想定した作業、もう一つはその路線上のある地点を発掘の現場に見立てて平板測量や細部測量に用いる図根点を増設する作業です。後者の測距にはスチールテープを使います。水準測量は全路線にわたっておこないます。

ここ数年、わが国の測量システムが変わり、世界測地系へ移行することが話題となっています。本研修課程でも毎回それについて紹介してきましたが、2001年6月に法律が国会で承認され2002年4月より実際に施行されるという状況になったので、今回はより切実に受けとめたようです。しかしながら、實際にはどのように対応したらよいか分からぬといふのも、正直なところです。

将来の測量の方向を示すものとしては、GPSと3Dスキャナーを紹介することが必要と考え、今回はいつものGPSに加えてスキャナーの実技見学を取

り入れました。使用した機種は1 mm以下の精度でセンターが描けるという点で目新しく、遺物の測量への応用を考えた研修生は多くいました。

### 発掘技術者研修 「官衙遺跡調査課程」

専門研修「官衙遺跡調査課程」は10月28日から11月2日までの延べ11日間の日程を無事終了しました。国府から郷閭関係官衙遺跡に及ぶ地方官衙遺跡の発掘調査や研究上の専門的な知識や技術を習得するための研修で、山形県から熊本県までの研修生18名が参加しました。そのほとんどが当該遺跡の調査経験があったり、これから調査にあたろうとする者であり、熱心な反応がみられました。

外部・内部の各講師による講議・実習・現地見学とも大変好評で、これまで見過ごしてきた発掘調査上の留意点や視点を学び、新たな目を開かれたとする感想が多く、この研修の継続を要望する意見も少なくありませんでした。今回も、古代建築構造の講義と春日大社着到殿での実測実習とを組み合わせたカリキュラムは、上部構造との関係を考えながら建物遺構の調査にあたる必要性を体得でき、大変有意義であったとする声が目立ちました。今回は、研修生同士の経験交流や情報収集が時間不足となるないよう、研修生自身による事例報告と意見交換の時間を増やしました。この方法も毎回好評で、研修に対する意欲を高める上で、また研修生相互のネットワークづくりにも効果的であったと思われます。

最近の地方官衙遺跡調査では末端の官衙関連遺跡が大きな問題となってきており、研修生からの質問や悩みもこうした遺跡に関するものが少なくありませんでした。この分野も講義では取り上げているものの、まだ明確な遺跡の性格判断などの方法は確立しておらず、こうした研修生の要望に応えられる基礎的な研究も重要な仕事であることを痛感させられました。

### 特別講座 「遺跡の保存と活用課程 II」

この研修は、各地の遺跡整備・活用の事例を取り上げて討議することを通じて、遺跡の整備手法や遺跡の活用法に関する専門的知識と技術を習得するとともに、遺跡整備の理念や遺跡の再生に向けた展望についても探ることを目的にしたものです。11月7日・8日の両日、遺跡整備活用の沿革についての講

義のうち、大分県安国寺集落遺跡、福岡県平塚川添遺跡、群馬県保渡田古墳群、大阪府新池埴輪窯跡、千葉県上総國分尼寺跡、岩手県志波城跡、福井県一乗谷朝倉氏遺跡、沖縄県首里城、の6つの遺跡についてそれぞれの復元整備例や活用の現状と問題点などが報告されました。

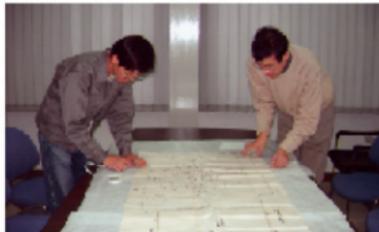
その後、全国各地ごとの遺跡整備の現状をコメントしたパネリストも加えて、遺跡整備の理念、遺跡復元の技術・手法、整備した遺跡の維持管理の方法、遺跡の活用などを主なテーマに討議をおこないました。参加者約100名で、遺構復元と遺構保存とをどう調整するか、遺跡保存とバッファーゾーン確保の問題、史跡公園とテーマパークとはどちらがうのか、などが議論されました。この研修で一定の結論が得られたわけではありませんが、遺跡の整備活用をどうすべきか、という問題は各地で直面している悩みであるだけに、時宜を得た企画として有意義であったとの感想が多くありました。ただし、日程の制約で討議が必ずしも十分深められなかつたという指摘もあり、今後改善すべき点あります。

この研修は、研究集会方式という新企画のものでありましたが、こうした研修を今後積極的に進めてもらいたいとの声が多く、これから他の研修においても前向きに検討すべき点であると思われます。

(埋蔵文化財センター)

## ▲ 興福寺所蔵絵図の調査

文化遺産研究部歴史研究室では現在、興福寺のご厚意により、興福寺所蔵の140点におよぶ絵図類を調査しています。1点1点について、ラベルを貼り、基本的な書誌事項を調書にとり、写真を撮影する作業を順次進めているところです。



興福寺所蔵絵図の調査風景

それらの絵図の過半は、興福寺の子院を描いた指図です。寛政3年(1791年)に各子院の指図を一括して作成しているようです。境内や建物の輪郭を描いた、図としては簡略なですが、面積・長さなどの書き込みがあり、当時の各子院の敷地・建物の状況を知ることができます。

明治維新までは、興福寺の寺域は現在よりもはるかに広く、現在の裁判所・県庁・文化会館・美術館・国立博物館・奈良ホテルやその周辺は、すべて興福寺の寺域だったのです。しかし興福寺はそのように大きな力をもっていたために、明治維新の廃仏毀釈の際には、寺の存続さえ危ぶまれる危機に見舞われます。その後関係者の努力によって、また寺勢を盛り返していることは周知の通りですが、興福寺旧境内地の景観が、昔と今とではすっかり変化してしまっていることは事実なのです。

近世以前の興福寺は、広大な寺域の中に、100あまりの子院が所狭しと立ち並んでいました。それらのうち、興福寺の中心伽藍や、一乘院・大乘院などの主要院家については研究も進んでいますが、以外の中小の子院については、よく分からぬ点が多いのです。今回の絵図類からは、それらの子院1つ1つの状況を詳しく知ることができます。まだ調査途中で、私たちも詳細を把握しきれてはいませんが、近世興福寺全体の景観を復原する上での、基本資料になるのではないかと思い、日々はりきって調査にいそしんでいるところです。

(文化遺産研究部)

## ▲ 中国河南省文物考古研究所との共同研究

奈文研と中国河南省文物考古研究所は、2000年度から5カ年計画で<sup>5157</sup>羣衆市に所在する唐三彩窯及び出土品に関する共同研究を実施しています。昨年度は、



羣衆市黄冶窯出土唐三彩

将来の発掘調査に備え、窯跡の分布調査・窯跡周辺の地形測量を実施しました。また相互研鑽を目的とした研究員交流も行なっています。

本年度の大きな事業は、これまで試掘調査や踏査で発見されている唐三彩を一冊の図録にまとめるごとと最近新しく見つかった唐三彩の窯跡の試掘、そして葦義唐三彩に関するこれまでの研究成果の公開です。10月の末には平城・藤原両調査部のメンバーが中心となり、図録作成のための遺物観察と撮影に出かけました。中国版図録は本年度末に、日本版は2002年度に出版します。

11月の後半には、中国から孫新民所長他4名の研究者をお招きし、22日には、孫所長と陳彦堂副研究员に講演をお願いしました。一般の方々にも聞いて頂く予定でしたが、来日の確定が遅かったため、やむなく近在の研究者約30名にお集まり頂き実施しました。孫所長には葦義唐三彩の研究成果を、陳氏には唐三彩が生まれる前提となった漢代多彩陶器に関する最新の研究成果をお話しききました。

(埋蔵文化財センター)

## 研究会の開催

### 第1回 瓦・磚の製作実験についての研究会

平城宮大極殿・大極殿院の瓦に関する研究会のうち、瓦・磚の製作実験について、第1回研究会を11月12日に奈良文化財研究所の小講堂でおこないました。当日は、研究所の内外から22名の方が参加しました。

討論の内容は大きく4つに分け、1) 製作実験の目的・意義、2) 生瓦を作るまでの技術的復元のあり方、3) 窯の構築法、4) 今後のスケジュールの順で話し合いがおこなわれました。

第一の製作実験をおこなう必要性については圧倒的に賛成意見が多かったのですが、瓦製作の実験的な試みと、実際に大極殿で使う使わないという問題とは、一応別立てにして検討すべきであるという意見でまとまりました。

第二の生瓦を作るまでの製作技法上の問題ですが、粘土の選択及び粘土自体の分析、粘土の練り方、桶状瓦器具の製作法、麻布の織り方、布袋製作法、縄叩き原体の復元などが話し合われました。

第三の窯の構築法については、事務局（考古第三調査室）側から、中山瓦窯の最古の窯は階段式登窯であるので、同一形態の2基を、一方は日乾しレンガで作り、他方は硬化剤を入れて固め、その後くりぬくという案を提示しました。これに対し、藤原宮の時代の瓦は須恵質で、平城宮になると焼きがあまい（大極殿の瓦も同じ）という巨視的な見方からすると、階段式登窯ではなく、平窯的な登窯にした方が良いのではないかという意見が出されました。討論の結果、最終的に階段式登窯1基、平窯的な登窯1基を作ることで意見がまとまりました。

第四の今後のスケジュールについては、まだ未定の部分が多いので十分な討論ができなかったのですが、さしあたりこの第1回の研究会をふまえて、考古第三調査室が「瓦・磚製作実験の計画書」を作り、来年度からの具体的な手順・費用を示すことを約束して会を終えました。この会に参加していただいた多くの人々・関係者に厚く御礼申し上げます。

(平城宮跡発掘調査部)

### 木簡学会第23回研究集会

木簡学会は、木簡に関する情報の蒐集・整理、木簡そのものについての研究・保存、その成果の普及と史料としての活用を目的とするユニークな学会です。奈文研が1975年から3回にわたって開催した木簡研究集会を母体として1978年に設立されました。

12月1日（土）・2日（日）の両日、今年で第23回を数える恒例の研究集会が、全国から160名に及ぶ日本古代史・考古学・東洋史・国語学などさまざまな分野の研究者の参加を得て、奈文研平城宮跡資料館講堂で開かれました。

「墨書き土器と木簡」（高島英之氏）・「都城出土漆紙文書の來歴」（古尾谷知浩氏）の2本の研究報告、「長岡京右京六条二坊の調査と出土木簡」（中



木簡学会研究集会の討論風景の一コマ

島皆夫氏)・「元岡・桑原遺跡群の調査と出土木簡」(吉留秀敏氏・坂上康俊氏)の2件の木簡出土事例報告の他、71に上る遺跡の古代から近代までの2001年新出土木簡情報も報告されました。

木簡の出土は全国で20万点を越えました。その研究において果たす奈文研と木簡学会の役割は、今後ますます大きくなることでしょう。

(平城宮跡発掘調査部)

## 平城宮跡第一次大極殿正殿復元工事

「平城宮跡第一次大極殿正殿復元工事」が、文部科学省文教施設部から発注されました。この工事は平城遷都1300年に当たる2010年の完成を目指して進めているものです。

奈文研はこの事業に協力しております。

(平城宮跡発掘調査部)



第一次大極殿正殿復元予定地

## 刊行物

### 『奈良文化財研究所紀要2001』の刊行

独立行政法人としての再出発にともない、毎年刊行してきた『奈良国立文化財研究所年報』も、体裁を一新することになりました。「奈良文化財研究所紀要」として新たなスタートを切ったその最初の号が、刊行の運びとなっています。

従来の3分冊構成を改めて一書にまとめ、1年間の調査と研究の成果を、よりわかりやすくご覧いただけるように努めました。内容はI～IIIの3部からなり、Iが研究報告、IIは飛鳥藤原宮跡発掘調査部、IIIは平城宮跡発掘調査部の発掘概要報告です。

表紙は比較的シンプルなデザインとし、東洋文明

から生まれた明朝体と、西洋文明に源流をもつゴシック体を組み合わせました。また、イメージとして発掘区を示す四角形と、研究をあらわす円形を配しましたほか、下方には若草山を表現しています。



紀要の表紙

### 『平城宮跡発掘調査出土木簡概報(36)』の刊行

平城宮跡発掘調査部史料調査室では、発掘調査で出土した主な木簡の速報として『平城宮跡発掘調査出土木簡概報』を編集してきました。先頃その36号を発行しました。昨

年の第315・316次調査出土の主要な木簡を中心に、62点について釈文・法量・型式番号といった基礎的なデータを掲載しています。収録木簡には、平城宮跡資料館の発掘速報展



木簡概報の巻頭写真より

話題となり、新聞報道もされた「訛り」を反映したかとも思われる「難波津の歌」の木簡などがあります。その他、昨年発行の35号からの継続で、「平城宮木簡一」の釈文の補訂を、木簡番号101～200について収録しました。また、本号から、巻頭の写真の大大幅増や、巻頭団版での赤外線デジタル画像の掲載、概報毎の木簡通し番号の付与など、より一層の利用の便宜を図っています。積極的な利用が期待されます。

(平城宮跡発掘調査部)

編集 「奈良文化財研究所紀要」編集委員会  
発行 奈良文化財研究所

